

体育教師からの運動遂行前に期待する言葉かけと パーソナリティおよび運動意欲との関係

石倉 忠夫

本研究は、生徒のパーソナリティおよび運動意欲と、運動遂行前の体育教師からの快または不快感情を喚起する言葉かけに対する期待との関連性について検討することを目的とした。大学生 955 名（男性 494 名、女性 461 名）を対象とし、高校時の体育教師を回想させて調査を行った。その結果、体育教師に対する“好感の程度”、パーソナリティに関しては“協調性”、そして運動意欲については主に“活動欲求”“親和欲求”が運動遂行前に期待する言葉かけに関与することが示唆された。

キーワード：言葉かけ、日本語版 Ten Item Personality Inventory、運動意欲、運動遂行前

1. 緒言

運動活動時において教師（または指導者）からの言葉かけは、生徒（または活動者）の運動意欲（学習意欲、やる気）に影響することが報告されている。例えば、少年サッカー選手を対象とした調査では、指導者からの肯定的なフィードバックは否定的フィードバックよりも選手の「やる気」が高まること、そして、指導者の言葉かけを「教授的理由」として捉えたと「安堵感情」が高まり、「やる気」が高まること報告されている¹⁾。また、大学生を対象としたダンス授業において、教師が過剰に指導したり助言をすることはダンスに好意を抱かせることに対して逆効果になる。しかし、承認の言葉かけをされると有能感をたかめ、特に女子では「教師が自分に指導してくれた」という満足感がより有能感を高めることが報告されている²⁾。吉村・日角³⁾は中学生の体育授業における仲間や教師からの言葉かけで、うれしいと感じる言葉を多く他者から受けた者ほど、他者受容感を高く獲得していることが示され、生徒個々の特性に応じてうれしいと感じる言葉を教師が多く発

することによって生徒の他者受容感の獲得が可能になり、運動有能感を高め、内発的に動機づけられた学習意欲の向上につながっていくと考察している。

矢澤⁴⁾は指導者の言葉かけが子どものやる気や認知に及ぼす影響についての研究を概観している。その結果、同じ言葉かけであっても、その言葉が子どもにどのような影響を及ぼすかは、指導者と子どもの人間関係の状態によってうれしさの程度は異なることが明らかにされたことを報告している。さらに矢澤⁴⁾は、単に言葉かけが否定的か肯定的かで分けるのではなく、子どもがその言葉がかけられた理由をどのように受け止めるか、また指導者との人間関係をどのように感じているのかといったように文脈に基づいて言葉かけの効果を理解していくことの重要性を指摘している。

石倉^{5) 6)}は大学生を対象とし、高校3年生時の体育教師を回想させ、教師の好感の程度、運動意欲、パーソナリティと教師の言葉かけに対する快／不快感情喚起との関連性について共分散構造分析を用いて検討した。その結果、運動

遂行前または遂行後の教師の言葉かけに対して、生徒のパーソナリティや運動意欲が言葉かけに対する快／不快感情喚起に直接的に影響するのではなく、教師に対する好感の程度を介して感情が喚起されるという関係性が見られたことを報告している。したがって、石倉^{5) 6)}の結果は、矢澤⁴⁾が指摘するように、指導者に対する好意の程度が指導者からの言葉かけに対する感情面の反応を大きく左右すると言えよう。

菅野・水落⁷⁾は、選手の試合に挑むときの心のコンディションを整えるための動機づけやストレス対処の主な役割になると考えられる試合前の言葉かけに着目し、選手に対し試合前の指導者からの言葉かけについてインタビューを実施し、選手が言葉かけによって動機づけられていくプロセスを検討した。その結果、選手の指導者からの言葉の受け入れ方をオープンあるいはクローズの状態に変えるという「指導者の言葉かけに対して形成される心構え」と、指導者にオープンな心構えであると言言葉かけに対してよりポジティブな感情に、クローズな心構えであると言言葉かけに対してよりネガティブな感情に変化するという「選手の動機づけの変化に先立ち引き起こされた感情の変化」の2つの有力な要因とプロセスが見出された。

Hanin⁸⁾はIZOF (Individual Zone of Optimal Functioning) モデルを提唱し、感情状態とスポーツ・パフォーマンス・レベルとの関連性を説明している。このモデルでは、最高のパフォーマンスが発揮できる精神状態には競技種目や選手個人によって異なるという考えのもと、主観的経験の構造に関する要素と変動過程に関する要素によって階層的に構造化することによって感情的反応を描写できるようにしている。主観的経験の構造に関しては「種類要素」「内容要素」「強度要素」が含まれ、変動過程に関しては「時

間要素」「文脈要素」が含まれている。このうち、「内容要素」は快－不快といった「快楽の傾向」と、適切－不適切といったパフォーマンスにおける「感情の衝撃」で構成されている。したがって、運動遂行前の快－不快の感情状態はパフォーマンスの出来栄を左右する可能性がある。試合直前の指導者からの言葉かけは選手の指導者に対する心構えと感情の変化に作用し、動機づけに影響するという菅野・水落⁷⁾の報告はこれを裏付けるものと解釈できよう。

これらの報告から、教師からの言葉かけに対する感情は、生徒個人のパーソナリティと運動意欲を基盤とし、体育教師に対する好感の程度と言言葉かけされた文脈において生徒がどのように言葉かけを受け止めるかに左右される。そして、その受け止め方が教師に対する心構えと感情の変化へ作用し、動機づけに影響するといえそうである。しかしながらこれらの報告は、教師（または指導者）からの言葉かけに対する反応に関して得られた知見であり、生徒（あるいは選手）が教師（あるいは指導者）に期待する言葉かけについては検討の余地が残されている。生徒が「このような言葉かけをしてほしい」といった面を運動意欲やパーソナリティの側面から理解することは、運動遂行前に生徒を動機づけるのにどのような言葉をかけるのかを考える上で重要な情報を提供してくれると考える。そこで本研究は、生徒のパーソナリティや運動意欲と運動遂行前の体育教師からの快または不快感情を喚起する期待する言葉かけとの関連について検討することを目的とした。

2. 方法

(1) 調査対象者

A 大学生 955 名（男性 494 名、女性 461 名）を調査対象とした。平均年齢は 19.7 歳 ($SD = 1.3$)

であった。

(2) 調査内容および実施方法

調査は大学の講義中に無記名にて実施した。

調査項目は調査対象者の年齢、性別、そして高校3年生時の体育教師1名を回想させ、その体育教師に対する好感の程度と運動遂行前に期待する言葉かけの選択を求めた。また、調査対象者のパーソナリティを検討するために日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)⁹⁾、運動意欲を検討するために運動意欲調査¹⁰⁾を取り上げ、それぞれ回答を求めた。

回想した高校3年生時の体育教師に対する好感の程度は、「好き」から「嫌い」の5件法にて評価を求めた。さらに、回想した体育教師から、運動遂行前に期待する言葉かけに対して回答を求めた。その選択肢は「①何も言わないでほしい」「②常に私を快い気分にする言葉をかけてほしい」「③常に私を不快な気分にする言葉をかけてほしい」「④常に状況に応じて快または不快にさせる言葉（賞賛、叱咤、激励）をかけてほしい」「⑤その他」の5項目であった。

TIPI-J⁹⁾は「外向性」「協調性」「勤勉性」「神経症傾向」「開放性」の5つの下位尺度で構成され、10項目の質問に対して「全く違うと思う」から「強くそう思う」までの7件法で回答を求めた。

運動意欲調査¹⁰⁾は「運動有能感」「親和欲求」「活動欲求」「競争欲求」「運動不安」「運動価値感」の6つの下位尺度で構成されている。本研究では回答の負担を考慮し、石倉⁵⁾が確証的因子分析で明らかにした18項目の質問を取り上げ、「よくあてはまる」から「まったく当てはまらない」の4件法にて回答を求めた。

TIPI-Jと運動意欲調査についてはそれぞれの得点算出方法にしたがって算出した^{5) 9)}。

(3) 分析方法

統計解析を行うにあたり、IBM社製SPSS Statistics Ver24を用い、有意水準を5%以下に設定した。

3. 結果

(1) 運動遂行前に期待する言葉かけの選択と体育教師に対する好感の程度との関係

教師に対する好感の程度の選択肢を「好き」「やや好き」を「好きな方」、「嫌い」「やや嫌い」を「嫌いな方」にまとめた。表1は体育教師に対する好感の程度別に運動遂行前に期待する言葉かけの選択の割合を示したものである。運動遂行前に期待する言葉かけと性差、そして体育教師に対する好感の程度との関係を検討するために χ^2 検定を行った。その結果、全体的に5%水準で有意差が認められた($\chi^2(8) = 22.84, p = .004$)。調整済み残差を確認した結果、体育教師を「好きな方」と思っている者は「常に状況に応じて快または不快にさせる言葉（賞賛、叱咤、激励）をかけてほしい」を選択する割合が高く(32.0%)、「嫌いな方」と思っている者は「何も言わないでほしい」を選択する割合が高かった(44.9%)。女性においても5%水準で有意差が認められ($\chi^2(8) = 25.75, p = .001$)、「好きな方」と思っている者は「常に状況に応じて快または不快にさせる言葉（賞賛、叱咤、激励）をかけてほしい」を選択する割合が高く(34.6%)、体育教師を「嫌いな方」と思っている者は「何も言わないでほしい」を選択する割合が高かった(45.8%)。男性において有意差は認められなかった。

(2) TIPI-Jと運動意欲調査の下位尺度と運動遂行前に期待する言葉かけ

運動遂行前に期待する言葉かけとTIPI-J、そ

表1 体育教師に対する好感の程度別の運動遂行前に期待する言葉かけ（数値：％）

好感の程度		選択肢				
		①何も	②快	③不快	④状況	⑤その他
好きな方	男性	32.9	33.5	3.2	29.4	1.0
	女性	21.6	41.4	1.5	34.6 ^a	0.9
どちらとも言えない	男性	28.7	39.6	1.0	29.7	1.0
	女性	31.1	36.5	2.7	29.7	0.0
嫌いな方	男性	44.3	25.3	5.1	25.3	0.0
	女性	45.8 ^a	35.6	3.4	11.9	3.4

全体： $\chi^2(8)=22.84, p=.004$, 男性： $n.s.$, 女性： $\chi^2(8)=25.75, p=.001$

^a：調整済み残差2.0以上

【言葉かけの選択肢】

①何も言わないでほしい

②快い気分させる言葉をかけてほしい

③不快な気分させる言葉をかけてほしい

④常に状況に応じて快または不快にさせる言葉（賞賛、叱咤、激励）をかけてほしい

⑤その他

して運動意欲の各下位尺度との関係を検討するために、各尺度における高得点群と低得点群の言葉かけの選択の割合について χ^2 検定を用いて全体そして男女別に比較検討した。なお、群分けには本調査で得られた各尺度得点の平均値+1標準偏差以上を高得点群、平均値-1標準偏差以下を低得点群として振り分けた。表2は各尺度において、調整済み残差の値が2.0以上を示した選択肢の高得点群と低得点群の割合の大小をまとめたものである。

TIPJにおける協調性尺度において、全体に有意差が認められた($\chi^2(4) = 22.88, p = .001$)。高得点群は「常に私を快い気分させる言葉をかけてほしい」を選択する割合が多く(高得点群:46.1%、低得点群:28.0%)、低得点群は「何も言わないでほしい」を選択する割合が多かった(高得点群:20.7%、低得点群:43.2%)。また、男性においても有意差が認められ($\chi^2(4) = 22.15, p = .001$)、全体の分析結果と同様な選択の特徴が示された。なお、その他の下位尺度に有意差は認められなかった。

運動意欲調査の各下位尺度について検討した

ところ、運動不安尺度以外の5つの下位尺度で有意差が認められた。運動有能感尺度において有意差が認められ($\chi^2(4) = 9.51, p = .050$)、低得点群の方で「何も言わないでほしい」を選択する割合が多かった(高得点群:22.6%、低得点群:36.3%)。また、女性において有意差が認められ($\chi^2(4) = 19.13, p = .001$)、高得点群は「常に状況に応じて快または不快にさせる言葉(賞賛、叱咤、激励)をかけてほしい」(高得点群:40.0%、低得点群:21.8%)を、低得点群は「何も言わないでほしい」を多く選択していた(高得点群:14.3%、低得点群:38.7%)。親和欲求尺度において($\chi^2(4) = 18.78, p = .001$)、高得点群は「常に私を快い気分させる言葉をかけてほしい」(高得点群:38.6%、低得点群:26.4%)と「常に状況に応じて快または不快にさせる言葉(賞賛、叱咤、激励)をかけてほしい」(高得点群:33.7%、低得点群:23.2%)を多く選択し、低得点群は「何も言わないでほしい」を多く選択していた(高得点群:23.8%、低得点群:46.4%)。女性に有意差が認められ($\chi^2(4) = 28.18, p = .001$)、高得点群は「常に状況に応じて快または

表2 TIPI-Jと運動意欲調査の各下位尺度における高得点群と低得点群の言葉かけ選択割合の比較結果
H（高得点群）またはL（低得点群）は調整済み残差 2.0 以上の群を示す

下位尺度			選択肢				
			①何も	②快	③不快	④状況	⑤その他
TIPI-J							
外向性	全体	男性					
		女性					
協調性	全体*	男性*	L	L	H		
		女性					
勤勉性	全体	男性					
		女性					
神経症傾向	全体	男性					
		女性					
開放性	全体	男性					
		女性					
運動意欲							
運動有能感	全体*	男性	L				
		女性*		L			H
親和欲求	全体*	男性	L		H		
		女性*		L		H	H
活動欲求	全体*	男性*	L	L			H
		女性*		L	H	H	H
競争欲求	全体*	男性	L				
		女性*		L		H	H
運動不安	全体	男性					
		女性					
運動価値感	全体*	男性*	L	L	H		
		女性*		L			

*p<.05

下線は男女全体の分析結果を示す

【言葉かけの選択肢】

- ①何も言わないでほしい
- ②快い気分にする言葉をかけてほしい
- ③不快な気分にする言葉をかけてほしい
- ④常に状況に応じて快または不快にする言葉（賞賛、叱咤、激励）をかけてほしい
- ⑤その他

不快にさせる言葉（賞賛、叱咤、激励）をかけてほしい」を多く選択し（高得点群：78.7%、低得点群：16.7%）、低得点群は「何も言わないでほしい」を多く選択していた（高得点群：15.3%、低得点群：53.3%）。活動欲求尺度において（ $\chi^2(4) = 20.48, p = .001$ ）、高得点群は「常に状況に応じて快または不快にさせる言葉（賞賛、叱咤、激励）をかけてほしい」を多く選択し（高得点群：35.1%、低得点群：17.9%）、低得点群は「何も言わないでほしい」を多く選択していた（高得点群：26.1%、低得点群：46.3%）。男性と女性それぞれ有意差が認められ（男性： $\chi^2(4) = 12.09, p = .017$ ）（女性： $\chi^2(4) = 13.42, p = .009$ ）、男女共に高得点群は「常に状況に応じて快または不快にさせる言葉（賞賛、叱咤、激励）をかけてほしい」を多く選択し（男性高得点群：26.3%、男性低得点群：10.9%；女性高得点群：46.6%、女性低得点群：21.5%）、低得点群は「何も言わないでほしい」を多く選択していた（男性高得点群：28.9%、男性低得点群：54.5%；女性高得点群：22.4%、女性低得点群：42.1%）。競争欲求尺度において（ $\chi^2(4) = 17.92, p = .001$ ）、高得点群は「常に状況に応じて快または不快にさせる言葉（賞賛、叱咤、激励）をかけてほしい」を多く選択し（高得点群：38.7%、低得点群：22.8%）、低得点群は「何も言わないでほしい」を多く選択していた（高得点群：18.9%、低得点群：36.6%）。この傾向は女性でも見られた（ $\chi^2(4) = 26.93, p = .001$ ）。運動価値感尺度において（ $\chi^2(4) = 23.38, p = .001$ ）、高得点群は「常に私を快い気分にする言葉をかけてほしい」を多く選択し（高得点群：38.9%、低得点群：23.7%）、低得点群は「何も言わないでほしい」を多く選択していた（高得点群：23.2%、低得点群：45.8%）。この傾向は男性（ $\chi^2(4) = 13.93, p = .008$ ）でも見られたが、女性（ $\chi^2(4) = 12.19, p = .016$ ）は低得点群が

「何も言わないでほしい」を多く選択する傾向のみ示された。

4. 考察

本研究は生徒のパーソナリティ及び運動意欲と教師からの運動遂行前に期待する言葉かけとの関連性について検討した。

運動遂行前に期待する言葉かけの選択と体育教師に対する好感の程度との関連性について検討したところ、体育教師を「好きな方」と思っている者は「常に状況に応じて快または不快にさせる言葉（賞賛、叱咤、激励）をかけてほしい」を選択し、「嫌いな方」と思っている者は「何を言わないでほしい」を選択する割合が高いという結果が得られた。この傾向は女性においても見られた。菅野¹¹⁾は指導者に対する肯定的態度は指導者の言葉かけに対してよく傾聴し、高揚感と期待感を高め、そしてかけられた言葉の意味内容を肯定的に理解し処理しようとすることを示唆している。したがって、本研究で得られた結果から、特に女性において、体育教師に対して肯定的な態度を示す者が指導者から状況に適した言葉かけを期待するのは、かけられた言葉の意味を積極的に理解し処理しようとする傾向の表れ、一方、否定的な態度を示すものは指導者の言葉かけに対して拒絶する傾向の表れであると推察される。

次にパーソナリティおよび運動意欲と運動遂行前に期待する言葉かけの選択について検討した。その結果、協調性の高いパーソナリティの持ち主は「常に私を快い気分にする言葉をかけてほしい」を、協調性の低いパーソナリティの持ち主は「何も言わないでほしい」を選択する割合が多かった。Talyabeeら¹²⁾によると、競技者は非競技者と比較し、Big Fiveの下位尺度のうち他者との関わりを示す2つの下位尺度で

有意に高得点を示したことを報告している。また石倉⁵⁾は協調性のパーソナリティ特性が、教師の好感の程度を介さず、直接的にメッセージの快／不快感情喚起につながることを報告している。したがって、他者との関わりに対して積極的なパーソナリティの持ち主は教師からの快感情を喚起するような言葉かけを望み、他者との関わりに消極的なパーソナリティの持ち主は教師からの言葉かけを望まない傾向にあると推察される。

運動意欲に関しては運動有能感、親和欲求、活動欲求、競争欲求そして運動価値感の高い者は「常に状況に応じて快または不快にさせる言葉（賞賛、叱咤、激励）をかけてほしい」「私を快い気分にする言葉をかけてほしい」を選択する割合が高かった。また、これらの尺度の低い者は高い者に比べて「何も言わないでほしい」を選択する割合が高かった。したがって、運動意欲の高い者（特に親和欲求と活動欲求の高い者）は教師からの積極的な言葉かけを望み、運動意欲の低い者は教師からの言葉かけを望まない傾向にあるといえる。石倉⁵⁾は親和欲求と運動価値感の高い者は快または不快感情を喚起するメッセージに対して快感情がより喚起されることを報告している。また、先に触れたように、菅野¹¹⁾は指導者に対する肯定的態度は指導者の言葉かけに対してよく傾聴し、高揚感と期待感を高め、そしてかけられた言葉の意味内容を肯定的に理解し処理しようとすることを示唆している。したがって、本研究の結果と石倉⁵⁾の結果から、運動行動に対して積極的な態度を示す者は、体育教師からの快感情を喚起する言葉かけや状況に応じた言葉かけを高く期待すると解釈される。

引用・参考文献

- 1) 名取洋典(2007)指導者のことばかけが少年サッカー競技者の「やる気」におよぼす影響. 教育心理学研, 55 (2): 244-254.
- 2) 内山須美子, 山路学 (2012)「現代的なリズムのダンス」の学習意欲・好意・有能感に関する研究. 白鷗大学教育学部論集, 6 (1): 67-90.
- 3) 吉村功, 日角知世 (2005) 体育における教師や仲間からの言葉かけが他者受容感に及ぼす影響. 北海道教育大学部紀要 教育科学編, 56 (1): 183-192.
- 4) 矢澤久史 (2007) 指導者の言葉かけが子どものやる気と認知に及ぼす影響. 東海学院大学紀要, 1: 211-217.
- 5) 石倉忠夫 (2018) 高校体育実技における教師からの言葉かけは生徒の好感の程度によって快／不快感情喚起に影響するの？—大学生の回顧によるアンケート調査に基づいて—. 京都文教短期大学研究紀要, 56: 103-115.
- 6) 石倉忠夫 (2019) 高校体育教師への好感の程度とパフォーマンス遂行前の言葉かけに対する快／不快感情との関係. 京都文教短期大学研究紀要, 57: 55-64.
- 7) 菅野慎太郎, 永落文夫 (2014) 試合直前におけるスポーツ選手の動機づけに影響する指導者の言葉かけ: エリート選手の語りに基づく質的分析から. 桜門体育学研究, 49 (1): 9-22.
- 8) Hanin, Y.L. (2000) Individual zones of optimal functioning (IZOF) model: Emotions-performance relationships in sports. In: Hanin, Y.L. (Ed.), *Emotions in sport*. Human Kinetics, pp65-89.
- 9) 小塩真司, 阿部晋吾, カトローニ・ピノ (2012) 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み. パーソナリティ研究, 21 (1): 40-52.
- 10) 猪俣公宏, 猪俣春世 (1989) 老年期における運動意欲の測定に関する研究. 昭和63年度文部省科学研究費 (一般研究C) 研究成果報告書.
- 11) 菅野慎太郎 (2016) スポーツ選手の指導者への対人認知が試合直前における指導者の言葉かけに対する心的構えに及ぼす影響 (50 周年記念号). 桜門体育学研究, 50 (2): 119-129.
- 12) Talyabee, S. R., Moghadam, R. S., and Salimi, M. (2013) The investigation of personality characteristics in athlete and non-athlete students. *European Journal of Experimental Biology*, 3 (3): 254-256.

【付記】本稿は MEXT 科研費 JP17K01651 研究課題「運動遂行前の情動喚起メッセージ聴取が運動学習に及ぼす影響」の助成を受けたものです。